

太田 芝山 しんざん
 木工作家太田芝山、その師である中川竹仙のことを知る人は、今のくらしいるだろう。かくいう私も、太田については、ご遺族から寄贈された本作品と県下に所蔵される作品を一度見たことがあるだけ、中川にいたっては名前を知るのみで、残念ながら作品に出会わない。
 太田は、明治32年東京生まれ、父の死後、岡山へ転居。広島県宮島出身の中川竹仙について木工芸の道に入った。刳物を得意とし、茶盆、鉢、棗、茶托など生活に身近な

「榎流れ稜喰籠」
 (昭和時代20C本館蔵)

鍵岡館長の
美術体験の記

奈良での仏像や床の間にかかる掛け軸という美術体験から、東京での西洋や日本の美術の実作を見ることで、やっとまともな美術体験ができたと思っていた。それは京橋や鎌倉の近代美術館であり、上野の東京国立博物館、国立西洋美術館であり、次々と開催しだした国内外の展覧会での絵画彫刻であった。それに東京都美術館での美術団体展での現代美術家たちの作品を見ることであった。ところが美の殿堂のような旧都美術館のなかで遭遇したとしか云いようのない読売アンデパンダン展は、それまでの美術体験をぶっ飛ばすようなものであった。既成の美術概念をすべて破壊するエタイの知らないガラクタが、美術館の空間や壁面を占領し、人間が意味不明な行為を繰り返していた。凄いエネルギーが放散され、ただ呆然とさせられた。そのなかでも記憶に残るのは、中西夏之の洗濯バサミの攪拌が何故か美しく、美術館からはみだして上野駅まで伸びていた高松次郎の紐が体にまとわりついた。

【館長 鍵岡正謹】

よそんちの展覧会(韓国編)

筆者は10月30日から2泊3日の旅程で、第5回ソウル国際メディアアートビエンナーレ(通称:メディアシティソウル)を訪れました。今回の「よそんちの展覧会」では、その様子をお伝えします。
 2008年はアジア=パシフィック地域において、多くの国際展が開催されました。それらにくらべると、メディアアートに特化した国際展は紹介される機会が少ないかもしれませんが、世界各国で多く開催されています。日本でも「文化庁メディア芸術祭」が年々活況を呈しているように、メディアアートは、すでにサブカルチャーという立場から脱皮し、現代美術の分野に市民権を獲得しつつあります。



メディアシティソウルの会場となったソウル美術館

今回で5回目(10年)という節目の年を迎えたメディアシティソウルは、ソウル市の中心にあるソウル美術館で開催され、「Turn & Widen」(転換と拡張)をテーマに26ヶ国から約80作品が展示されました。会場は老若男女であふれており(入館無料ということもあったのでしょうか)、メディアシティソウルの認知度の高さをうかがい知ることができました。
 館内は各階ごとにテーマに基づく展示がされており、1階のテーマは“光”、2階のテーマは“コミュニケーション”、そして3階のテーマは“時間”というように、メディアアートに関わりの深い3つのキーワードのもと、様々なスタイルの作品が展示されていました。
 きわめて短期間のうちにメディアの領域が拡大し、新しいテクノロジーが出現するこの時代において、メディアアートの様相は日々劇的に変化しています。過去4回をふまえて、「メディアアートとは何か?」「伝統的な芸術とメディアアートの違いは何か?」を振り返りながら、「メディアアートはどんな変化をもたらし、どんな影響を与えてゆくのか?」を検証した内容となっていました。
 今回の訪韓では10月9日に竜仁市にオープンした、ナム・ジュン・バイクアートセンターにも足を伸ばしましたが、紙面の都合からまたの機会に紹介したいと思います。
 【学芸員 齋藤武郎】

ものを中心に制作しようだ。第16回日本伝統工芸展で日本工芸協会会長賞を受賞、県展審査員を務めるなど、木工芸の振興に尽力し、昭和49年岡山県指定重要無形文化財保持者に認定されている。昭和55年津山市で死去。
 太田の蒸陶を受けた世代も高齢化し、手間のかかる刳物を手がける作家は年々少なくなってきた。太田が亡くなって30年足らず、技術の継承という面からも作品や資料がもう少しあればと思う。
 【学芸員 福留 幸】

寄贈作品紹介

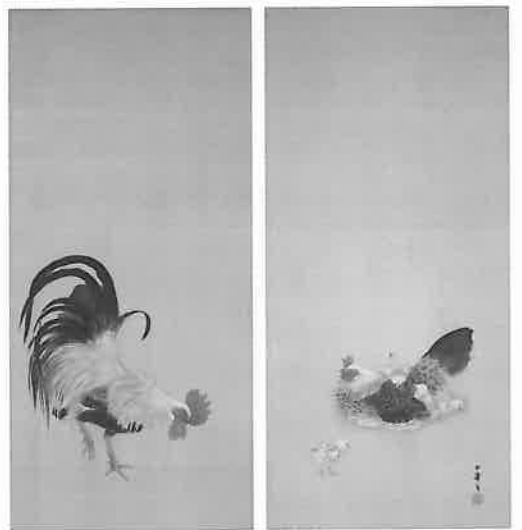
○片岡球子「裸婦」
 岡山では毎年正月に天満屋葺川会館において院展が開催され、新春の風物詩ともなっている。今年1月に103歳で亡くなった院展の重鎮片岡球子(1905~2008)のダイナミックで独創的な作品を心待ちにしていたファンも多かったことだろう。
 球子自身は北海道生まれであるが、両親の出身は岡山県。父喜三郎は総社市、母多賀は里庄町出身である。大正15年女子美術専門学校(現女子美術大学)日本画科を卒業後、横浜で小学校教諭となる。昭和5年再興第17回院展に「枇杷」が初入選、「落選の神様」とあだ名されるほど、落選を経験した時代が続いた。しかし34歳以後は毎回入選し、大観賞・日本美術院賞等受賞を重ね、47歳で日本美術院同人、56歳で評議員となる。女子美術大学教授、愛知県立芸術大学教授を勤めるなど、後進の育成に尽力し、平成元年文化勲章を受章した。
 球子は61歳から始めた<面構シリーズ>と78歳からの<裸婦シリーズ>でよく知られている。腰かけたり横たわったりのポーズをとった女性の、たっぷりとした量感をダイナミックに描く。彼女の表現意欲は実にたくましい。
 このたび、両親の出身地である岡山の当館に、球子本人の遺言により寄贈された作品「裸婦」。美し



<裸婦像>

い群青の岩絵具で塗り込められた背景から、裸婦が鮮やかに浮かび上がる。当館が開館した昭和63年に制作されたという縁のある作品である。開館時には「面構(山東京伝・楳原憲斎)」(第66回院展出品作品)と「舞楽(抜頭)」(第9回サンパワロ・ビエンナーレ出品作品)も寄贈いただいている。最後まで岡山に心を寄せてくださった作家とご遺族に深く感謝したい。
 なお来年、平成21年4月29日~5月17日、「追悼 片岡球子展」が当館にて開催される予定であり、球子85年の画業を振り返る絶好の機会となる。

○高橋秋華「鶏図屏風」
 このたび、寄贈を受けた高橋秋華(1877~1933)の「鶏図屏風」(絹本着色・2曲1双)は、右隻に雌鳥と雛4羽、左隻に雄鶏を描いたもの。雄鶏は雌鶏の方向に歩み進むポーズで描かれ、ちょうど雄雌の視線がぶつかり合う。雛たちは母鶏の背中に乗り、じゃれ合っている。夫婦愛・家族愛をテーマに描いたものであろうか。ふわふわした羽毛の雛はかわいらしく、じっと見ているとほのぼのとした暖かい気分になる。鳥は秋華が最も得意としたモチーフで、庭で小ささまざまな鳥を慈しんで飼育していた。秋華が庭に出ると、孔雀が喜んで羽を大きく広げるほどだったという。的確に捉えられた親鶏の形態や質感表現からは、秋華の暖かい眼差しと鋭い観察力が伝わってくる。
 高橋秋華は、現在の岡山市西大寺に生まれた。本名敏太。別号に半香・聴鶯居がある。はじめ石井金陵に南画を学び、後に都路華香、ついで山元春挙に師事する。明治神宮聖徳記念絵画館の壁画第1図「御降誕之図」が代表作であるが、その壁画全80図は、当時の一流の日本画家・洋画家が選ばれ制作しており、その第1図の制作依頼を受けたということは、中央でもかなり高い評価を得ていたことを裏付けるものであろう。文展等で活躍したが、その後中央画壇を離れ、戦後は岡山で悠々自適に過ごした。私淑した岡本秋暉の得意とする花鳥画の世界と、師春挙のモダンで色彩豊かな画風とに影響を受け、清雅で格調高い画風を持ち味とする。



<鶏図屏風>

当館で高橋秋華を紹介する特別陳列を開催したのは平成18年7月であったが、その会期終了後に「海金剛図屏風」(紙本墨画・2曲1隻)と「雁来紅紫図」(紙本着色・1幅)の寄贈を受けた。今回3点目の所蔵作品となったが、力量の割にまだまだ十分な再評価を受けていないとみなされるので、今後も紹介に努めたい。

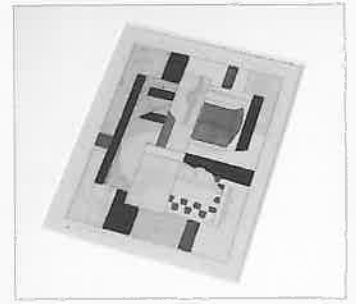
寄贈者のご厚意に心より感謝いたします。
 【主任学芸員 中村麻里子】

●●●● 坂田一男研究会の立ち上げ ●●●●

11月15日の美術館講座で「坂田一男 研究の現状と展望」と題して話すのを機会に、坂田一男に関心を持っている方々に呼びかけて、研究会を立ち上げ、40名の方に賛同していただきました。昨年、坂田一男展を実施し、これまでほとんど目に触れなかった作品・資料を多く展示紹介しましたが、それらの作品・資料が当館に寄託され、研究の態勢が整いました。
 今後は新たに明らかになったことを公開し、意見を交換しながら進めていくのがよいのではと考え、会報を出したり定期的に集まって話し合う中で、情報が共有され、新たな展望が開けてくるのではと期待しています。
 坂田に直接師事した方々の多くが鬼籍に入り、坂田を直接見知っている人たちも少なくなってきました。研究会では直に見聞きした方の体験談を聞く機会を設け、坂田に関心を持つ若い人たちへ坂田の姿が少しでも伝わって欲しいと願っています。
 研究の課題としては、第一にパリ時代の坂田の動向と作品について、調べていく必要があります。坂田は帰国に際し、油彩の作品は1点も持ち帰らず、トランクの中には何枚かのデッサンとスケッチのみが入っていたそうです。実は、フランスから坂田の水彩デッサンを持っているという知らせがあり、これを譲っていただきました。「sakata 26」と年記とサインがはいっています。この時期には坂田は、レジェに師事し、アカデミー・モデルヌのレジェの教室の助手を務めていました。レジェやオザンファンなど親しくしていた画家たちとの交流をもっと明らかにすることにより、坂田のピュリスムとの関わりを確認する必要があると考えています。



美術館講座の様子



フランスで見発見されたデッサン

パリ時代の後半は住所も分からなくなり、どのように生活していたのか、よくは知られていませんでした。戦後まもなく「新燈」という雑誌に発表していたオワーズ河での生活振りを書いたエッセイと自筆の原稿、それに「オワーズ河漫筆」と題したスケッチから推定して、坂田はメリエルの対岸にあるムラン・ア・ヴァンというレストラン兼ホテルに住んでいたようです。
 ここに紹介する水彩エスキースは、所蔵者がメリエルのガレージセールで見つけて買い求めたそうです。実は坂田のパリ時代の水彩エスキースは、まだ見つかっていません。ですから、これは貴重な一枚といえるのではないのでしょうか。
 どうして作品を1点も持ち帰らなかったのか、色々推測がなされていますが、坂田自身がこの頃の事についてほとんど口を閉ざしているのも、真相ははっきりしていません。
 パリの住所で判明しているのは、ヴィラ・デ・ザールで、今もモンマルトルの墓地の近くにありますが、芸術家の集合アトリエとして古い歴史を持っています。当時、美術の中心はモンパルナスに移り、マンモルトルには日本人画家はほとんどいなかったそうですが、坂田はあえて日本人のいない場所を選びここから、モンパルナスのアカデミー・モデルヌに通ったわけですね。
 面白いことに気づきました。國吉康雄の最初のパリ滞在(1925年)の折の住所がモンパルナスのサント・ブーブ街で、アカデミー・モデルヌのあるノートルダム・デ・シャン街とはすぐ隣だということです。二人は同じ1889年に岡山市に生まれており高等小学校も一緒だったのですが、相知ることがなかったようです。面白い偶然ですね。
 もう一つの課題は、帰国後の坂田の制作とA.G.O.(アヴァンギャルド岡山)での活動を明らかにすることです。
 戦後の時期は、手紙や書簡が沢山残されていますので、まずはこれを書簡集としてまとめたいと考えています。
 筆者は、坂田一男の画家としての身の処し方に強く惹かれます。坂田は絵を売ろうとしなかったと伝えられていますが、画家が自分の絵を売らないでどうやって生計を立てることができるのか。「豆腐一丁の生活」と語るような生活で、絵具にも困る状態でした。聞くところによると、晩年は藁の煤を使って黒色を作って使っていたそうです。白はジंकオキシドを使って作る、という記述が坂田の葉書の中にできます。画材分析をしてみなければ分かりませんが、制作への驚くべき執念ではないでしょうか。
 【学芸課長 妹尾己克】